国指定史跡
武蔵国分寺跡 附東山道武蔵路跡
歴史公園ガイドブック

Ver.5

天平の記憶 つないだ100年 つなぐ100年

National Historic Site

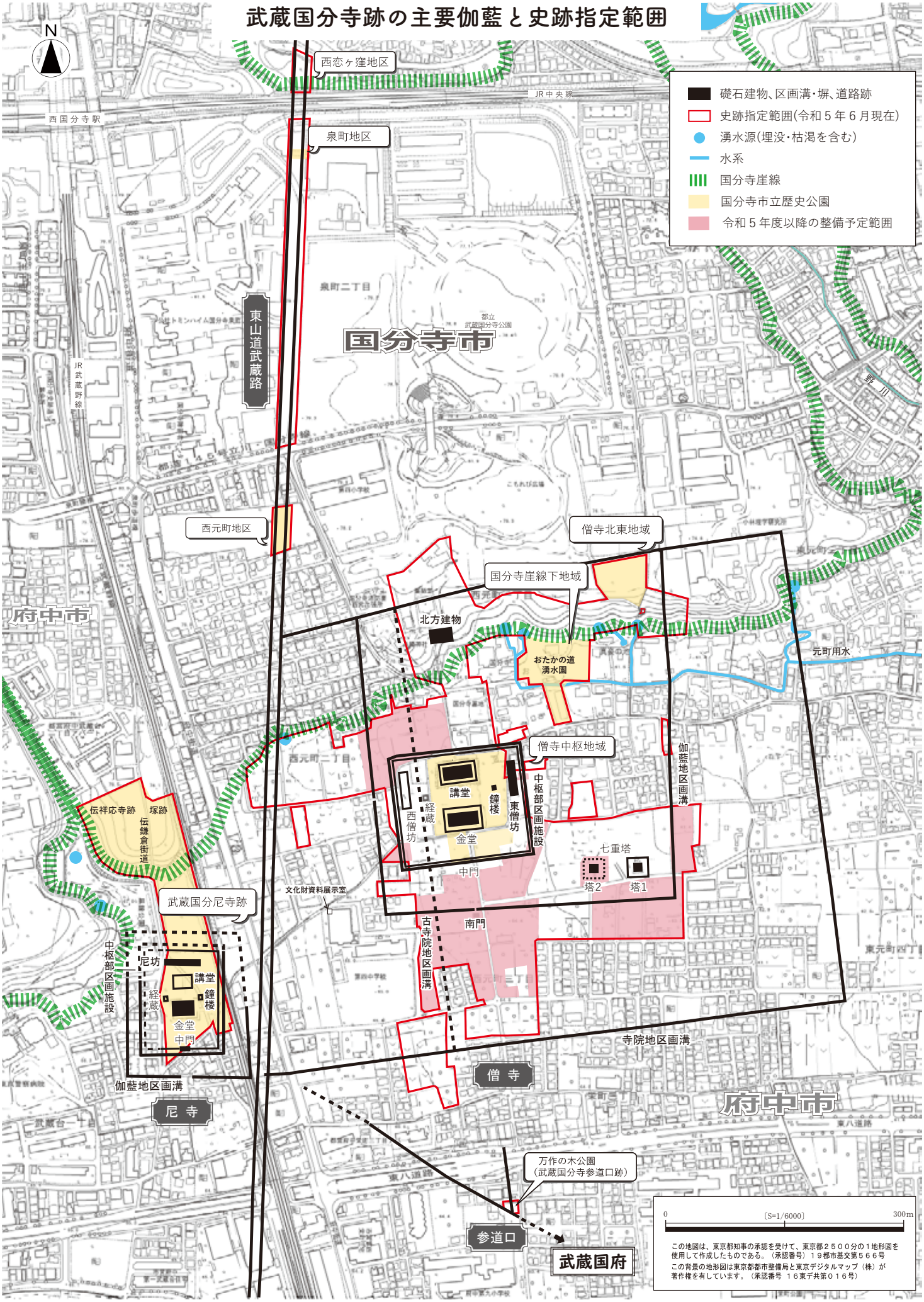
Musashi Kokubunji Temple Site, Appendix :*Tosan-do Musashi-michi* Road Site

The Guidebook for Historical Parks in Kokubunji City

史跡武蔵国分寺跡は、2022年で史跡指定100周年を迎えました

国分寺市教育委員会

武蔵国分寺跡の主要伽藍と史跡指定範囲



武蔵国分寺跡
（僧寺中枢地域）

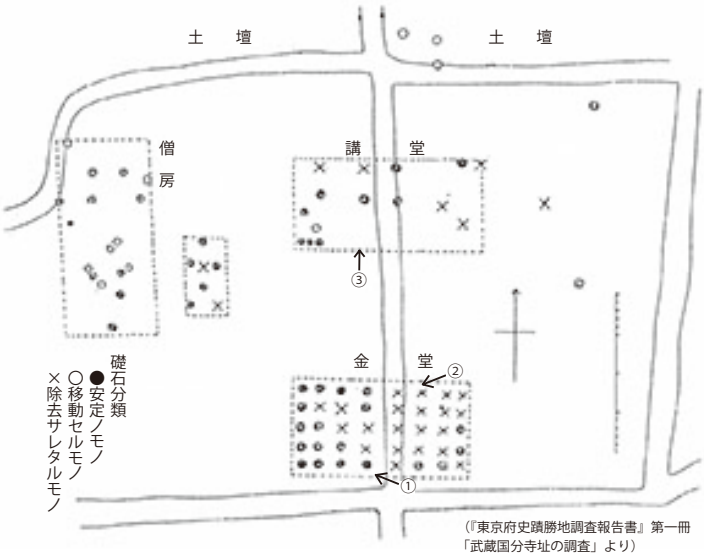
Musashi Kokubunji Temple Remains
（Central part of the temple cloister）

奈良時代中頃の天平13年(741)、聖武天皇は仏教の力で国を安定させるため、諸国に国分寺の建立を命じました。武蔵国では湧水が豊富な国分寺崖線を背にして、都と国府を結ぶ駅路(東山道武蔵路)の東側に僧寺、西側に尼寺を配しました。武蔵国は多磨郡をはじめとする21郡からなり、国分寺の造営にあたって武蔵国内の人々の力が総結集されました。しかし、完成したのは土器や瓦、漆紙文書等の出土資料から、天平宝字年間(757～765)頃と考えられます。

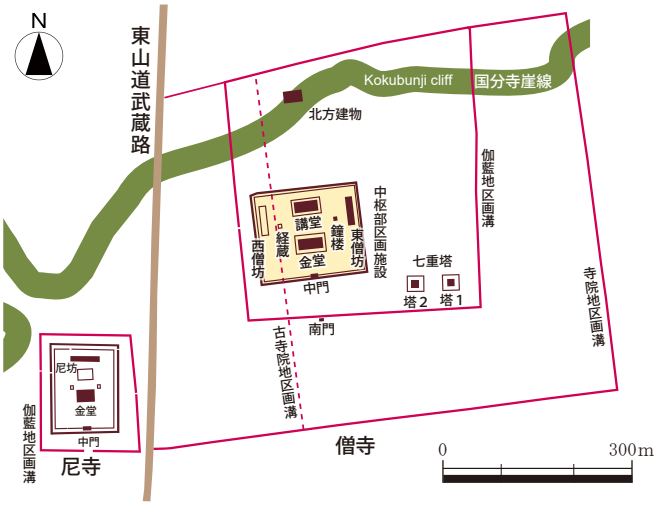
僧寺は中枢部、伽藍地、寺院地の三重に区画されています。中枢部には北から順に、経典などを講読する講堂、本尊を安置していた金堂、入口にあたる中門が主軸を揃えて一直線に並び、その両側には梵鐘を吊った鐘楼と、経典を収蔵した経蔵、僧が起居する東僧坊・西僧坊などがありました。これらの建物は塀と溝によって囲まれ(中枢部区画施設)、その規模は東西で約156m、南北で約132mを測ります。また塀の構造は、発掘調査の結果、掘立柱塀から築地塀へと作り替えられたことが明らかになっています。

中枢部の外側には、中門から南へ約60m離れて南門、東へ約200mの位置に七重塔がそびえ、これらの堂塔は溝によって周囲と画されていました。さらに、金堂を中心とした東西約2km、南北約1.5kmの範囲には竪穴建物や掘立柱建物が広がり、寺院を支えていた集落は広域に及んでいたことが判っています。

正面（南）から見た僧寺伽藍中枢部



大正11年（1922）頃の僧寺伽藍中枢部における礎石分布状況



武蔵国分寺跡の主要伽藍と僧寺中枢部

史跡指定の経緯

武蔵国分寺跡は、大正8･9年に行われた東京府による実地調査（瓦や礎石の分布調査）を踏まえ、その重要性から史蹟名勝天然紀念物保存法に基づく国の「史蹟」に指定されました。

指定種別及び名称

国指定史跡　武蔵国分寺跡 附東山道武蔵路跡

指定年月日

大正11年10月12日

追加指定年月日

昭和51年12月22日　昭和54年5月14日　昭和57年7月3日
平成10年12月25日　平成14年12月19日　平成17年3月2日
平成17年7月14日　平成18年7月28日
平成22年8月5日（東山道武蔵路跡が附で追加指定）
平成29年10月13日
令和3年10月11日

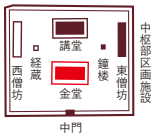
武蔵国分寺今昔（左：大正時代、右：整備後の現況）

①金堂基壇南西（南東から撮影）

②金堂基壇北西（北東から撮影）

③講堂付近から国分寺崖線を望む（南から撮影）

整備完了後の金堂基壇（北東から）



金堂跡（こんどうあと）

Kondo Hall (Main Hall)

（平成 29・30 年度整備）

金堂は本尊仏を安置する仏殿で、塔とともに寺院を構成する重要な建物です。武蔵国分寺の金堂は四周に廂を伴う礎石建物で、桁行７間×梁行４間の規模を有します。基壇上に本来36個据えられていた礎石は、現在19個が残っています。

建物が乗る基壇の外装は乱石積で、外周に幅約１ｍの雨落石敷が巡り、南面と北面の中央には石積の階段が伴います。礎石と雨落石敷の高さの差から、基壇の高さは約70～90cmあったものと想定されます。また、北階段は建物中央の柱間一間分の幅であるのに対して、南面の階段はその約３倍の規模を有することから、建物は南側を正面としていたことが判ります。基壇を造成するにあたっては、建物より一回り広い範囲に対して地面を約1.3m掘り下げ、その中はローム土・暗茶褐色土・黒色土を交互に版築する掘込み地業を施した後、基壇も同様に版築で積み上げています。さらに、個々の礎石の下部には約２ｍ四方、深さ１ｍ程の掘込みを伴い、石と土の互層による版築で突き固めた壺掘り地業を施し、根固石を据えた直上に礎石を設置するなど、極めて堅牢な基礎地業を行っていた様子が発掘調査で明らかになりました。

また、建物の屋根は入母屋造もしくは寄棟造で、廂を支える礎石と雨落石敷までの距離から、軒先の出は16～17尺程度（約4.8～5.1ｍ）と想定され、国分寺の金堂としては全国でも最大級の規模と荘厳さを誇っていました。

金堂前面に幡を掲げて儀礼を行っている様子（イメージ図）　作画：大塚 敦子

金堂跡の基壇復元整備について

金堂跡からは発掘調査で塼と呼ばれる古代のレンガが出土しているため、基壇の上面は塼敷仕様とし、その色合いも出土品との近似色で再現しています。また、古代の礎石19個は現状を維持し、後世に持ち去られて無くなった礎石の場所には同じ位置で円形の礎石を補充し、建物の大きさを表しました。

なお、発掘調査では明確な範囲を捉えられませんでしたが、基壇上面の中央やや北寄りに桁行３間×梁行１間程度の須弥壇(仏壇)を復元しています。上面中央には八角形の印を３か所、四隅に正方形の印を茶色で舗装して、本尊である釈迦如来像と脇侍菩薩像(文殊菩薩・普賢菩薩)、四天王像(持国天・増長天・広目天・多聞天)が安置されていた場所を表示しています。

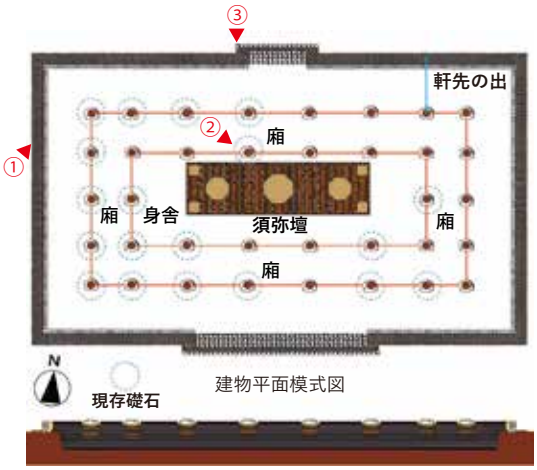
整備工事中の様子（南西から、平成 29 年 12 月撮影）

【建物規模】
桁行７間：東西約36.2m（122尺）
梁行４間：南北約16.6m（56尺）

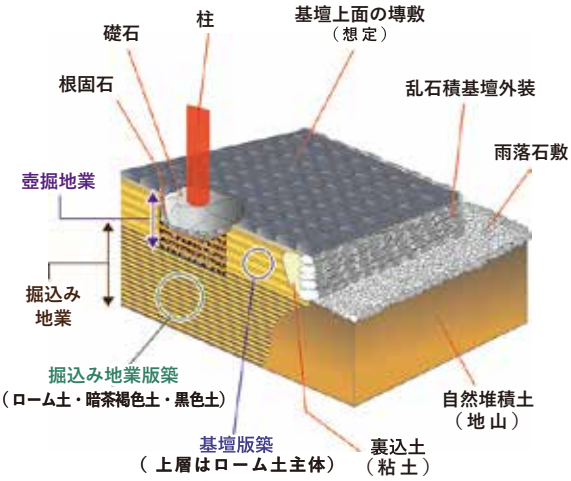
【屋根構造】
四面廂建物
（入母屋造もしくは寄棟造）

【基壇規模】
東西約45.4m×南北約26.2m

【基壇縁外装】
河原石による乱石積基壇外装



建物平面模式図



掘込み地業・基壇・礎石据付状況模式図

基壇断面模式図

基壇西辺部の掘込み地業と基壇積土の版築状況
（南西から/上図①▶印）

根固石による礎石の据付状況
（北西から/上図②▶印）

北階段検出状況（北から/上図③▶印）

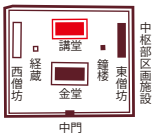
金堂基壇整備後の全景（南東から）

金堂基壇整備後の全景（南西から）

須弥壇上に安置された仏像のイメージ図（南から）

北階段・雨落石敷の整備状況（北東から）

整備完了後の講堂基壇（南東から）



講堂跡（こうどうあと）

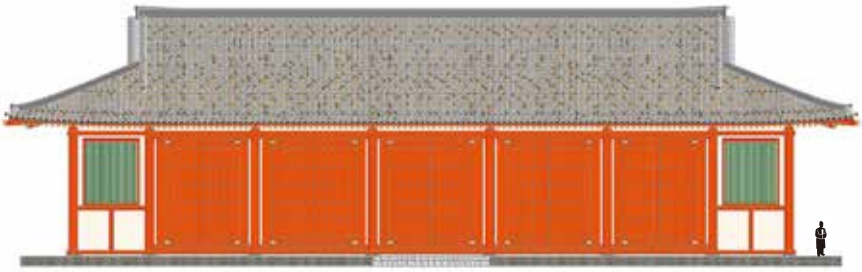
Lecture hall (preaching hall)

（平成 25・26 年度整備）

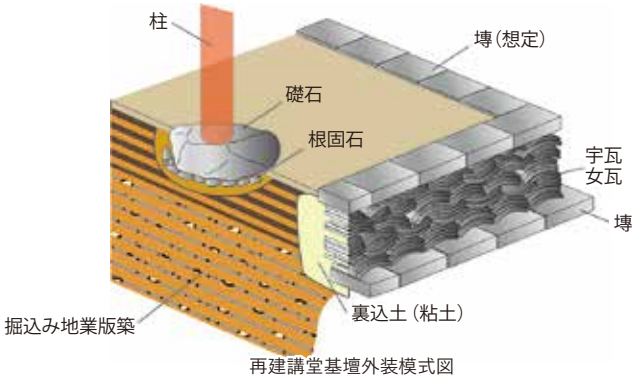
講堂は、経典の講義が行われた建物です。武蔵国分寺の講堂は、桁行５間×梁行４間の二面廂の東西棟礎石建物として8世紀中頃に創建されました。そして９世紀後半に東西両側に各１間増築して、金堂と同規模である桁行７間の四面廂建物に建て替えられました。その際、屋根も切妻造から入母屋造もしくは寄棟造に変わりました。

講堂の基壇外装の底部は、創建時には河原石を据えているのに対し、再建時には塼を敷くなど工法に違いが認められますが、いずれも外装は瓦積で、乱石積を施す金堂や七重塔とは大きく外観が異なる建物といえます。再建に伴って基壇自体も東西両側に増築しており、その規模は東西約42.2m、南北約22.6mを測ります。また、階段は基壇の南面と北面のそれぞれ中央に構築土が残されていたことから、その規模は幅が一間であったと想定されます。

講堂を全面的に建て直した背景としては、弘仁９年（818）もしくは元慶２年（878）に東国を襲った大地震により建物が被災した可能性が考えられます。



再建講堂イメージ図（南から、入母屋造屋根の案）



再建講堂基壇外装模式図

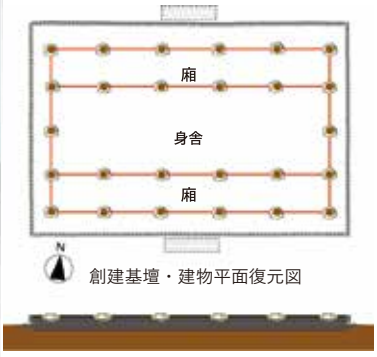
創建講堂

【建物規模】
桁行５間：東西約28.5m（96尺）
梁行４間：南北約16.6m（56尺）

【屋根構造】
二面廂建物（切妻造）

【基壇規模】
東西約34.3m×南北約22.6m

【基壇縁外装】
河原石を地覆とした瓦積基壇外装



創建基壇・建物平面復元図

創建基壇断面復元図

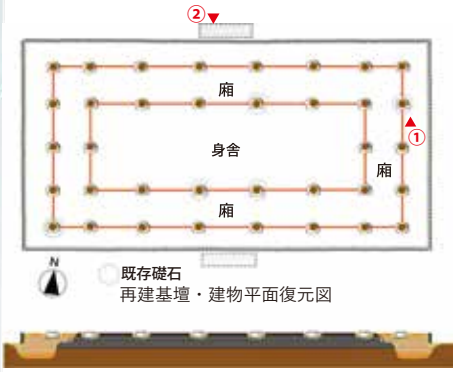
再建講堂

【建物規模】
桁行７間：東西約36.2m（122尺）
梁行４間：南北約16.6m（56尺）

【屋根構造】
四面廂建物
（入母屋造または寄棟造）

【基壇規模】
東西約42.2m×南北約22.6m

【基壇縁外装】
塼を地覆とした瓦積基壇外装



再建基壇・建物平面復元図

再建基壇断面復元図

昭和31年の日本考古学協会による発掘調査（南から）

発掘調査で検出された基壇外線と礎石（南から、左ページ◀①印）

発掘調査で検出された再建時の瓦積基壇外装（北面中央付近、左ページ◀②印）

瓦積基壇復元整備工事の様子（平成25年度施工）

整備前の中枢地域（平成21年度、南上空から撮影）※講堂跡発掘調査中

瓦生産地と消費地を結ぶ講堂基壇復元－鳩山町との連携－

1．講堂基壇の復元

平成25・26年度の２年間を費やして、再建時の講堂基壇を原位置にて復元しました。南・北・東面の基壇外装の瓦は、古代の瓦を模して色や形にバラつきを持たせた三州瓦（愛知県高浜市）を用い、西面には埼玉県比企郡鳩山町の町民と国分寺市民が手作りで制作した瓦を使用しています。さらに東面の中央約１ｍの範囲には、発掘調査で表土中から出土した瓦を積み上げて展示しました。基壇上に残存していた５個の礎石はそのままの姿を見せながら、遺構を保護するため周辺に盛土をしたことにより、復元した基壇高は実際の高さの約３分の１程度となっています。基壇上面で、礎石が失われている箇所には安山岩製の円形石を補充し、建物範囲にはレンガをめぐらせています。なお、南北階段の部材には、東京都埋蔵文化財センター、かながわ考古学財団等の協力を得て、各地の遺跡の発掘調査現場で出土した石材を活用しました。

2．鳩山町との連携事業“平成の国分寺造営”

鳩山町は東日本最大級の古代窯業遺跡「南比企窯跡群」の中心地で、武蔵国分寺創建期の瓦の約８割を生産していました。鳩山町と国分寺市は、古代における瓦の生産地と消費地という往時の繋がりを活かして、文化財を通じた交流・連携事業を進めています。平成25・26年度は、鳩山町産の粘土と鳩山町文化財ボランティアの皆さんが製作した道具を用いて「古代瓦作り体験教室」を開催し、多くの国分寺市民、鳩山町民が参加しました。瓦は約３ヵ月程度の乾燥期間を経て、鳩山町農村公園内の復元古代窯で焼成されました。

武蔵国府・国分寺と武蔵国内の主要窯跡群

各地の発掘調査現場出土石材を活用して整備した階段

基壇西側に積んだ市民・町民手作りの瓦

基壇東側に積んだ講堂跡出土瓦

手作り瓦を基壇に埋め込む作業の様子

古代瓦作り体験教室

復元古代窯での焼成（鳩山町農村公園内）

鳩山町を出発する古代の瓦制作工人（はとやま祭）

鳩山町民から国分寺市民への瓦受け渡し式（国分寺まつり）

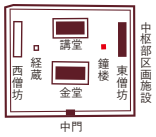
その後、平成25年11月２日の「はとやま祭」では、古代の瓦制作工人の衣装を身に纏った人たちが武蔵国分寺へ向けて瓦を背負って運上する出発式が、その２日後の11月４日には「国分寺まつり」で国分寺市民への瓦の引き渡し式が盛大に行われました。

こうして制作した瓦の多くは、町市民の交流の証として復元講堂基壇西面の外装に活用することとし、翌年12月13日に、工事関係者の協力のもとで、町市民自らが基壇の外面に瓦を埋め込む行事を開催しました。それぞれの思いを刻んだ文字瓦を、基壇に重ねていく笑顔が大変印象的でした。瓦作り体験教室は回数を重ねるごとに、より良質な製品を制作することが可能となり、制作技法や焼成方法の試行錯誤の跡が瓦の色味にも現れて、結果的には本物に近いイメージの基壇外装を復元することが出来ました。

鳩山町と国分寺市の文化財を通じた交流は現在も継続中で、平成30年３月には文化・経済・教育・スポーツ・観光などの分野でも相互に支援・協力する友好都市協定の締結にまで両町市の関係が深まっています。なお、平成30年度の史跡整備工事では、金堂と講堂間を連結する礫敷・瓦敷通路遺構を復元しましたが、そこでも鳩山町の皆さんが制作した古代瓦を数多く活用しています。

武蔵国分寺創建期の瓦を焼成した古代の窯跡 － 新沼窯跡 －

整備完了後の鐘楼跡（南西から）



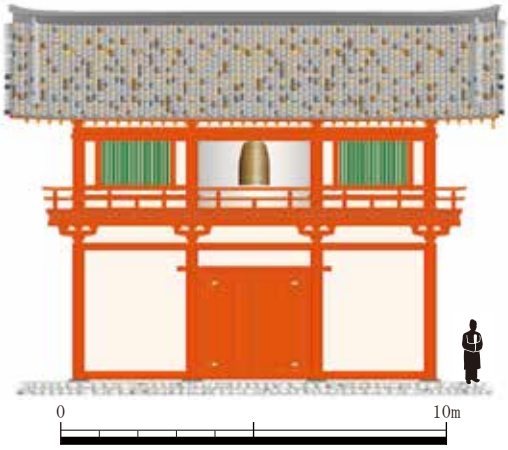
鐘楼跡（しょうろうあと）

Belfry (Bell Tower)

（平成 28 年度整備）

鐘楼は、時を告げる梵鐘を吊り下げた建物です。古代の寺院では、鐘楼と経蔵（経典を納める建物）は同じ規模の建物で、中軸線を挟んだ東西対称の位置に建てられるのが通例でした。武蔵国分寺では、東西どちらを鐘楼と考えるのか、過去の研究では諸説ありましたが、昭和40年の発掘調査時から東側の建物跡を鐘楼と推定しています。鐘楼跡では、昭和40年と平成22・23年度に発掘調査を２回行っており、礎石を据え付けた痕跡が12箇所で確認されたことから、桁行３間×梁行２間の南北に長い礎石建物と判明しています。基礎地業は、南北約14.3m、東西約11.5m、深さ約１mの規模で地面を掘り込み、ローム土と黒色土を交互に突き固めて版築する総地業を施しています。２個残る礎石のうち、原位置を留めるのは１個のみで、根固石を敷いた上に据え付けられていました。この礎石の表面は赤く変色しており、火災などで熱を受けたことが想定されます。建物南側には東西に石列・瓦列が並び、基壇外装や基壇縁を示す可能性があります。さらに、基壇の周囲からは多くの瓦片が出土しており、建物が倒壊し散乱した痕跡と思われます。

建物の平面規模が法隆寺の鐘楼、経蔵とほぼ同じであることから、構造も法隆寺と同様に１階に天井のない２階建てで、西側を正面とする「楼造」の可能性があります。



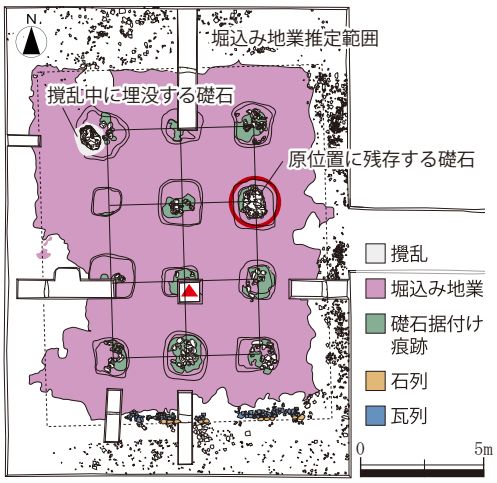
鐘楼イメージ図（西から、梵鐘は三河国分寺を参考に作成）

【建物規模】
桁行３間：東西約9.2m（31尺）
梁行２間：南北約5.9m（20尺）

【屋根構造】
楼造（切妻造）

【基壇地業】
南北約14.3m、東西約11.5mの総地業／基壇を含めた版築の厚さは約１mと推定

【基壇規模・構造】
南北約14.3m、東西約11.5m
基壇高約50cm
階段、雨落施設は未確認
基壇高は南側石列と残存礎石天端の比高差から推定

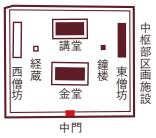


鐘楼跡遺構全体図（上が北）

残存礎石と根固石（西から）左図○印

堀込み地業断面
（中央トレンチ北壁）左図▲印

鐘楼跡全景（上が北）



中門跡（ちゅうもんあと）

Middle Gate

（平成 28 年度整備）

【建物規模】
桁行３間：東西約9.5m（31尺）
梁行２間：南北約5.9m（20尺）

【建物構造】
礎石建物／三間一戸の八脚門
屋根構造は不明
入母屋造や寄棟造の可能性もあり

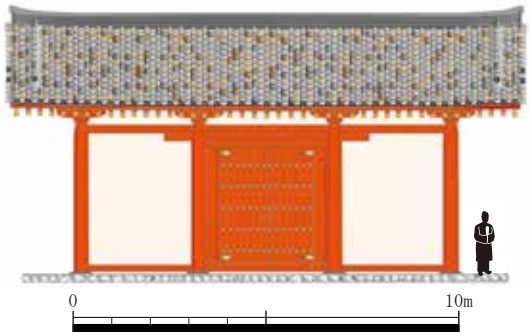
【基礎地業】
壺掘地業（約1.5m四方、深さ約１m）12箇所
地業下部に完形品を含む瓦を敷いている

【基壇規模・構造】
基壇、階段、雨落施設は未確認だが四周に小溝がめぐることから、基壇の規模はおよそ東西14m、南北10m程度と推定

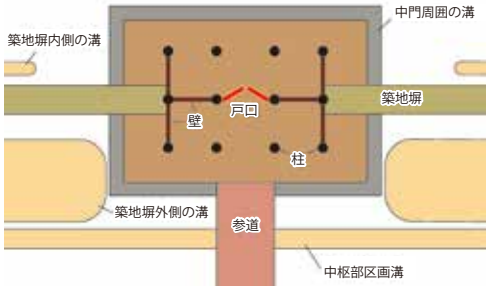
中門は、金堂・講堂・鐘楼・経蔵といった寺院の主要建物を囲む塀の南面中央に設けられた門です。昭和40年と平成17～19年度の発掘調査では、礎石下部（柱位置）の壺地業を12箇所発見し、その配置から中央間に扉が取り付く八脚門と判明しました。また、南側に参道と思われる硬化面も確認されています。中門の周辺は後世に削平を受け、礎石や基壇は残っていませんでしたが、門の南西・南東には礎石と思われる大石が９個埋没しており、建物の四周に巡る小溝の存在から、基壇の規模を推定しました。壺掘り地業は、深さ約１mの穴にローム土と黒色土を交互に固く版築し、底面には屋根用の瓦を敷き詰めていました。これらの瓦は８世紀中頃の製品のため、礎石建ての中門は国分寺創建期の建物であることがわかります。また、この中から出土した那珂・高麗・幡羅郡の郡名が書かれた瓦は、中門の建設に際して同郡の協力があった可能性を示しています。

法隆寺東大門など現存する八脚門から屋根構造は切妻造と考えられますが、表土中から隅切瓦が４点出土しており、武蔵国分寺の中門は入母屋造や寄棟造であった可能性もあります。また、時期は不明ですが、ほぼ同位置で、後に掘立柱建物（東西約7.9m、南北約5.1m）へ建て替えられたことが判明しています。

整備完了後の中門跡（南東から）



中門イメージ図（南より、切妻造屋根の案）



中門平面模式図

中門跡遺構全体図

礎石下部の壺掘地業（左図○部分、南から）

群馬県寄贈のクロマツ

（平成 29 年度看板設置）

講堂跡西側のクロマツ

武蔵国分寺は、元弘３年（1333）に新田義貞と鎌倉幕府方との間で行われた分倍河原の合戦の際に焼失し、その後建武２年（1335）に新田義貞の寄進により薬師堂が金堂跡付近に建立され再興したと伝えられています（『医王山縁起』）。

武蔵国分寺の金堂跡には、新田義貞の手植えと伝わる大きなアカマツがあり、長らく史跡の象徴として親しまれていました。しかし、行楽客が根元で焚き火をしたことからアカマツは枯れてしまい、昭和40年（1965）６月７日に伐採されます。

昭和43年（1968）３月に武蔵国分寺跡を訪れ、この事を知った前橋市文化財調査委員が新田義貞ゆかりの群馬県へ連絡し、同年４月５日に群馬県より「県の木」クロマツ２本が寄贈され、金堂跡西側と講堂跡西側（現在地）に植樹されました。

昭和 36 年頃の金堂跡のアカマツ（南から）

昭和 43 年クロマツの植樹（南から）

中門・金堂間の
幢竿遺構（どうかんいこう）

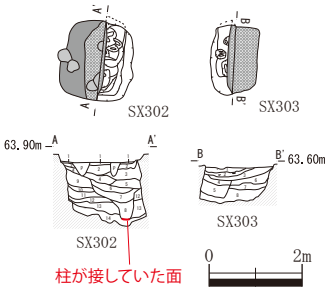
Flagpoles between Middle Gage and *Kondo* Hall

（平成 28 年度整備）

幢竿とは、宗教儀礼の際に装飾として用いる幡を吊り下げる柱のことです。中門と金堂の間からは、伽藍中軸線上に東西に並ぶ２列の大きな柱穴が検出され、幢竿の痕跡と推定しています。南側の柱列（SX302・303）は、金堂建物の中心から南へ約35ｍの位置で、中軸線を挟んで東西に１基ずつ立ち、２本１組の幢竿と考えられます。

柱の中心間の距離は約３ｍで、西側の柱穴SX302は南北1.8ｍ、東西約1.5ｍの隅丸方形で深さ約1.5ｍを測ります。SX302の埋土の最下層で、柱が接していた面があり、柱の径は約30㎝と想定されます。北側の柱列（SX304・305・306）は金堂建物の中心から南へ約20ｍの位置で、中軸線を挟んで西に２基、東に１基が確認されました。柱の中心間の距離は約3.4ｍで、柱穴は南側に残る２基の柱列よりもやや小さく、SX304で南北約1.0ｍ、東西約0.6ｍ、深さ約0.9ｍを測ります。未確認ですが東側（現在の道路下）にもう１基の存在が想定され、４本１組の幢竿であったと考えられます。これらの遺構から、金堂の前面（南側）が儀礼空間であったことが窺えます。

中門・金堂間の幢竿遺構（上が北）



SX302・SX303平面/断面図

SX302（東から）

復元した幢竿と幡（令和４年11月 文化交流イベント）

金堂・講堂間の
通路と幢竿遺構（つうろとどうかんいこう）

Passage and Flagpoles between *Kondo* Hall and Lecture Hall

（平成 30 年度整備）

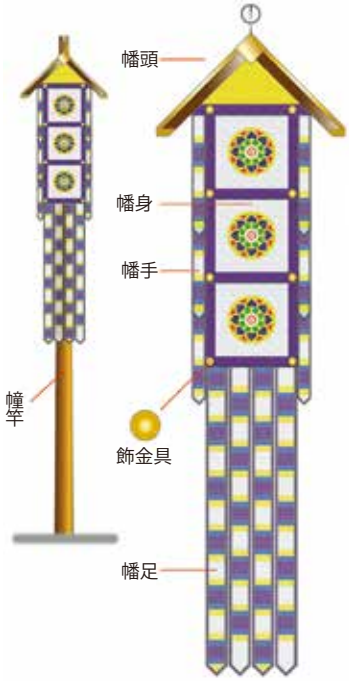
平成23年度の発掘調査で、金堂と講堂の建物間を繋ぐ通路状の遺構が発見されました。規模は幅員約4.2ｍ、延長約29.5ｍで、路面は北側へ向かって緩やかに低くなっています。この通路は南北に４本の石列が並行して走り、石列と石列の間には、礫と瓦片を一面に敷き詰めて路盤を形成しています。通路の脇に柱穴列がないことから回廊のような屋根は伴わず、僧侶が２棟の建物を往来するために使用したものと考えられます。

また、講堂基壇の南側には、通路を挟んで約６ｍごとの間隔で東西に３基ずつ、計６本の幢竿遺構が確認されました。柱穴の掘り方は約１m四方の方形を呈し、深さは90cm前後で、柱の径は20cm程度と想定されます。金堂の南側と同様に、講堂南側でも仏・菩薩の権威を示す幡が掲げられました。

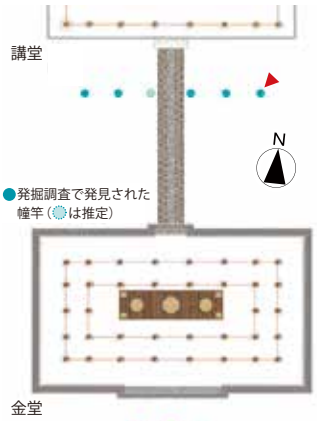
復元した幢竿

礫敷・瓦敷通路遺構（左側の列に鳩山町の瓦を使用）

発掘調査で検出した通路状遺構（上が北）



幡イメージ図



堂間通路・幢竿遺構模式図

講堂南側の幢竿遺構（▲印）

僧寺伽藍中枢地域（平成 23～令和２年度整備）

市重要有形文化財（建造物）旧本多家住宅長屋門

国分寺崖線下地域

Beside *Kokubunji* Terrace

平成17・18年に国史跡の追加指定を受けた国分寺崖線下の現国分寺東側一帯の敷地は、その後２年間にわたる整備工事を経て、平成21年10月18日から有料公園施設「おたかの道湧水園」として開園しました。

おたかの道湧水園

Otaka-no-michi Spring Park

おたかの道湧水園は、江戸時代に国分寺村の名主を務めた旧本多家の屋敷地跡にあります。園内にある２階建ての建物１階を、史跡を中心に地域の文化財を紹介する展示施設「武蔵国分寺跡資料館」、２階を教育委員会ふるさと文化財課の執務室として利用しています。

また、市重要有形文化財（建造物）の旧本多家住宅長屋門（江戸末期建築・平成27～29年保存修理工事）と倉（明治33年創建・昭和８年改修）のうち、屋敷の表門と先代当主の隠居所を兼ねた長屋門は、生活空間を再現した内部展示と近世の歴史と民俗の資料展示をしています。

湧水をはじめ、良好な自然環境に囲まれた園内には、国分寺市の名木ケヤキがある他、四季折々の植物を鑑賞することができ、開園10周年を迎えた令和元年度には、これまで未公開の湧水源保全地区の一部が整備され、湧水を引いて作られた池の周辺を散策できるようになりました。

入園料は、自然環境を大切に残していくための維持管理費に充てています。

おたかの道湧水園　園内図

【史跡の駅 おたカフェ】

現在全国に約1,600箇所ある「まちの駅」の一つで、トイレのある無料休憩所兼案内所として、国分寺市内でも訪問者・散策者の多い史跡武蔵国分寺跡につくられました。

休憩所や案内所としての役割のほかに、おたかの道湧水園への入園券の販売、文化財関連図書の販売、市民ボランティアによる史跡ガイド（無料・要申込）の受付、国分寺の名産品の販売などを行っています。

【武蔵国分寺跡資料館】

「見る」・「学ぶ」・「訪ねる」をコンセプトにした、史跡武蔵国分寺跡を紹介する資料館です。

おもに史跡武蔵国分寺跡の出土品を展示して、これまでの発掘調査の成果や、市内の文化財、史跡武蔵国分寺跡の整備事業などを紹介しています。館内にはWi-Fiの環境を整備したほか、文化財関連図書の販売や学習コーナー、デジタルサイネージによる情報発信コーナーもあります。

公衆無線LANサービス「Kokubunji City Free Wi-Fi」使えます！

SSID：Kokubunji_City_Free_Wi-Fi_01
インターネット接続時間＝１回60分、接続回数＝制限なし

① 旧花沢橋の鋼材

② 恋ヶ窪廃寺跡の礎石

③ 武蔵国分寺七重塔推定復元模型（縮尺1／10）

④ 市重要有形文化財（建造物）旧本多家住宅倉

⑤ 池付近の散策路（令和元年度整備）

⑥ 湧水源観察ポイント

尼寺跡全景（南から）

武蔵国分尼寺跡

むさしこくぶんにじあと

Musashi kokubun-niji nunnery Remains

聖武天皇の詔で鎮護国家を祈願する官立寺院として、国分寺は「金光明四天王護国之寺」（僧寺）とともに「法華滅罪之寺」と呼ぶ尼寺が建立されました。「法華経」は女人成仏を説き、尼寺の成立には女人救済を願う光明皇后の意向が大きく働いたとも言われています。

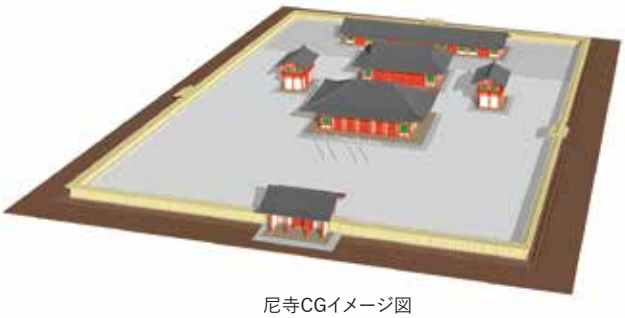
武蔵国では国府（現府中市）に近く、国分寺崖線を背にして南面する当地が好所として選ばれ、東山道武蔵路の西側に尼寺、東側に僧寺を配置します。

尼寺は東西に約150m、南北160m以上の範囲を素掘りの溝で区画した内側に、南門（未確認）・中門・金堂・講堂（未確認）・尼坊を中軸線上に並べ、金堂背後の東西に想定される鐘楼・経蔵（ともに未確認）と講堂背後の尼坊までを、中門から両翼に延びる掘立柱塀が囲い込み、中枢部の区画を構成しています。

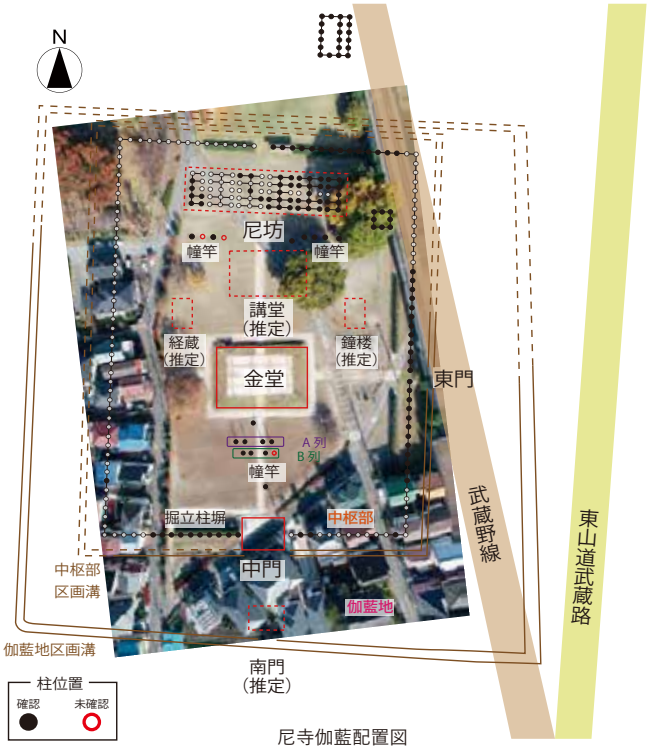
尼寺中枢部は、昭和39年に無断現状変更により宅地開発が行われたため、翌年、緊急の発掘調査を行い金堂と尼坊が確認されました。これを機に市では公有化事業を進め、昭和50年代の寺域確認調査を経て、平成４～７年度に史跡整備に伴う発掘調査によって伽藍全体の様相が明らかとなりました。現在の歴史公園は平成９～14年度に整備工事を行い、翌15年度より供用を開始しています。

幡竿と金堂基壇（南から）

史跡指定標柱（北から）



尼寺CGイメージ図



尼寺伽藍配置図

公園全体図

金堂基壇(南西から)

尼坊跡(南から)

金堂基壇版築観察施設(西から)

斜めに立つ幡竿遺構(南東から)

復元した掘立柱塀(南西から)

掘立柱塀(南西から)

中枢地区入口広場(南東から)

僧寺北東地域
Northeast of monastery area
（北辺区画溝）

僧寺北東地域全景（北東から）

僧寺伽藍地の北東部にあたるこの地域は、緑豊かな国分寺崖線上に位置しています。約13mの比高差をもつ崖線の麓には、環境省の名水百選に選ばれた「お鷹の道・真姿の池湧水群」があり、湧水群は東京都指定名勝や東京の名湧水 57 選にも選定されています。当地で大型開発が計画された折に、市民が主体となって水と緑と文化財の保全を求める運動がおこり、平成 14 年に関係者の努力が実って、国の史跡に追加指定されました。そして、湧水かん養・自然環境保全のため緊急に環境整備を行う必要があることから、平成 18・19 年度に僧寺地区では最初の保存整備工事を実施しました。

敷地の北縁には、伽藍地（寺院地）の北辺を区画する幅2.1～3.0m、深さ 0.8～1.2mの素掘りの溝が東西方向へ走っています。金堂・講堂・鐘楼・僧坊等がある伽藍中枢部と、その外側に広がる七重塔・南門・北方建物等の建物を囲む伽藍地は、この素掘りの溝によって広大な敷地を取り囲んでおり、その規模は東辺長 428.3m、南辺長 356.3m、西辺長 365.4mを測り、北辺長は当該地の約70mの区間を含めて384.1mに及びます。

整備イメージ図（北東から）

万葉集に因んだ植物と歌の展示（散策路沿い）

区画溝断面観察施設（遺構復元展示、西から）

伝鎌倉街道 切通し(南から)

伝鎌倉街道・伝祥応寺跡・塚跡

でんかまくらかいどう　でんしょうおうじあと　つかあと

Kamakura-kaido Road, Shouoji Temple remain and Mound remain

伝祥応寺跡・土塁（東から）

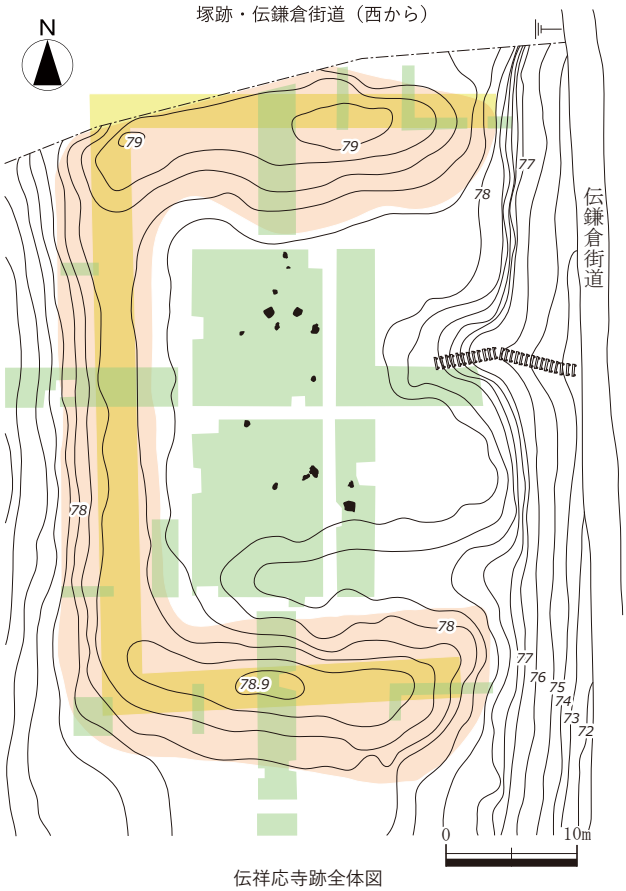
塚跡・伝鎌倉街道（西から）

鎌倉幕府は関東の有力御家人の領地と鎌倉をつなぐ交通網の確立を図り、鎌倉街道と呼ぶ道路を整備しました。秩父付近に本拠地をおく畠山重忠や、上野国（群馬県）の新田義貞らが鎌倉を目指して南下したのがこの鎌倉街道（上道）と思われます。

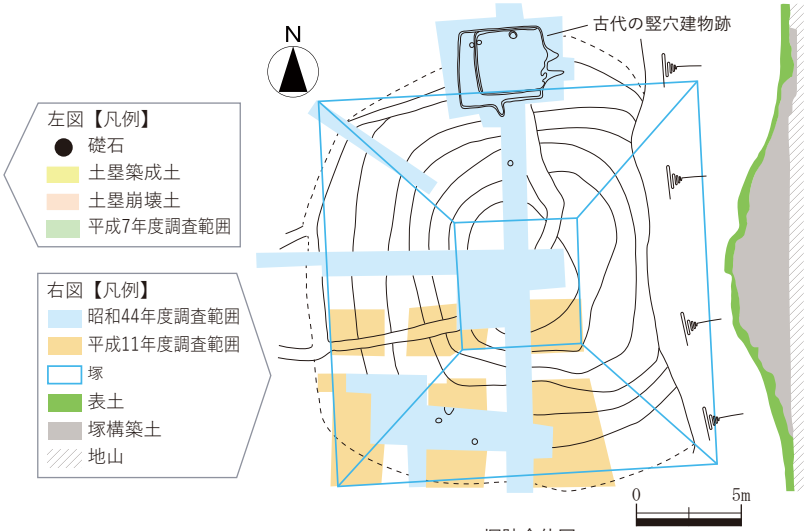
尼寺北方の国分寺崖線には、「伝鎌倉街道」と呼ばれる切通し状の道路跡が走り、道を挟んだ台地上には中世寺院（伝祥応寺）跡と塚跡があります。さらにこの道の北側で現在のJR西国分寺駅付近にも、鎌倉時代から室町時代にかけての年号を刻んだ板碑が出土した恋ヶ窪廃寺跡と呼ばれる寺院跡がありました。

本遺構は、尼寺伽藍の一部とする説がありましたが、昭和44年・平成11年の調査によって、鎌倉時代末頃に建てられた寺跡と判明し、本多四丁目の祥応寺の前身にあたると考えられています。旧鎌倉街道の切通しに面して、土塁（基底部幅３m、高さ1.2m以上）と溝が三方に巡り、東西約30m、南北約45mの長方形の区画が形づくられています。現存する大小15個の礎石の分布などから、その中心に東西９m、南北18mほどの規模の瓦を用いない堂が存在したと推察されます。

また、伝鎌倉街道東側に位置する塚（盛土遺構）は底面一辺約22m、高さ約３mで、一辺約７mの平坦な頂部を有する方錘体と復元され、周囲の地山層（黒褐色土）を削った土で築かれています。武蔵国分寺に関係する「土塔」といわれてきましたが、２度の発掘調査の結果、14～15世紀頃に種々の祈願の成就を得るために築かれた修法壇跡で、対岸の伝祥応寺跡と関係する塚と考えられます。



伝祥応寺跡全体図

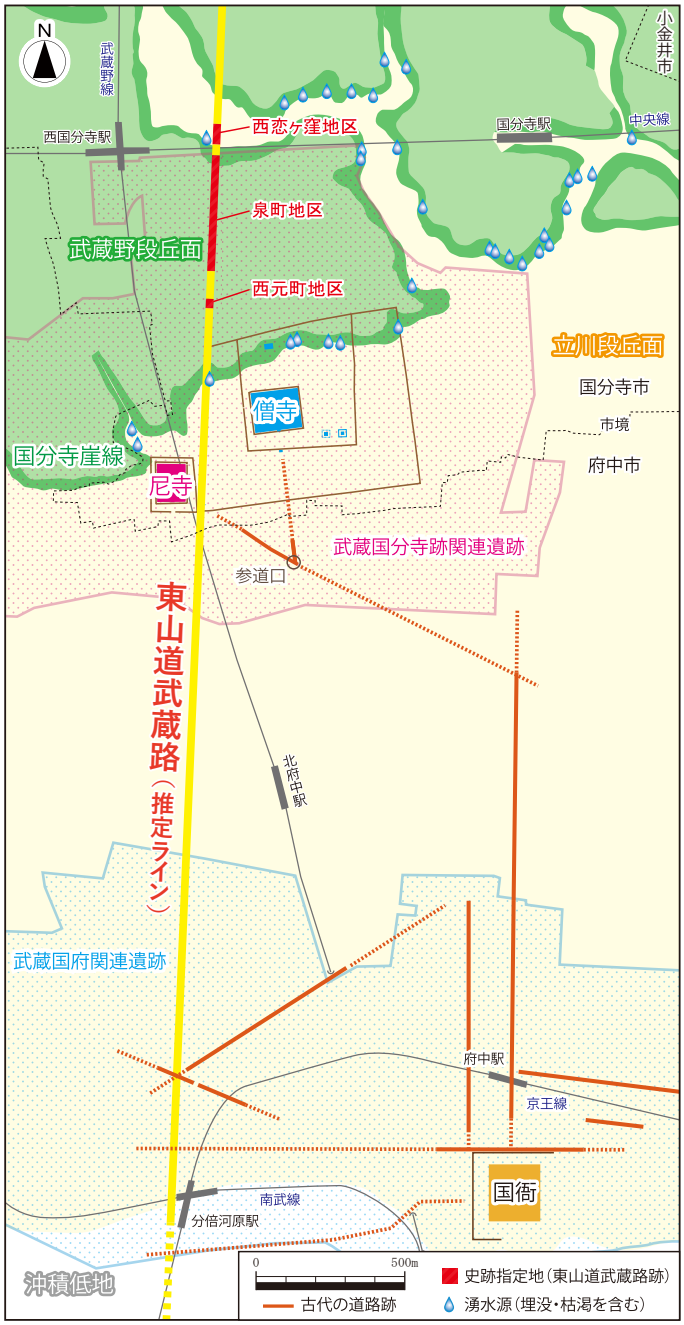


塚跡全体図

東山道武蔵路（とうさんどうむさしみち）

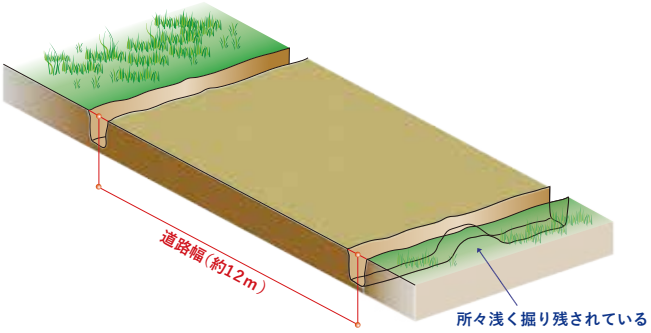
Tosan-do Musashi-michi Road Site

市内には都と地方を結ぶ古代の官道（東山道武蔵路）が南北に縦貫し、南方は武蔵国府へ通じていました。市域を通過する距離は約２kmと東山道全体のごく僅かな区間ですが、これまでに約60箇所以上で道路跡の発掘調査が行われ、地形の起伏に応じた多様な道路構造が明らかになっています。このうち、西元町・泉町・西恋ヶ窪の３地区で東山道武蔵路跡は武蔵国分寺跡の附として、平成22年に国の史跡に指定されています。



東山道武蔵路と武蔵国分寺・国府

東山道武蔵路周辺の古代道路網



東山道武蔵路（第1期）イメージ図

泉町地区の側溝土層断面（南から）

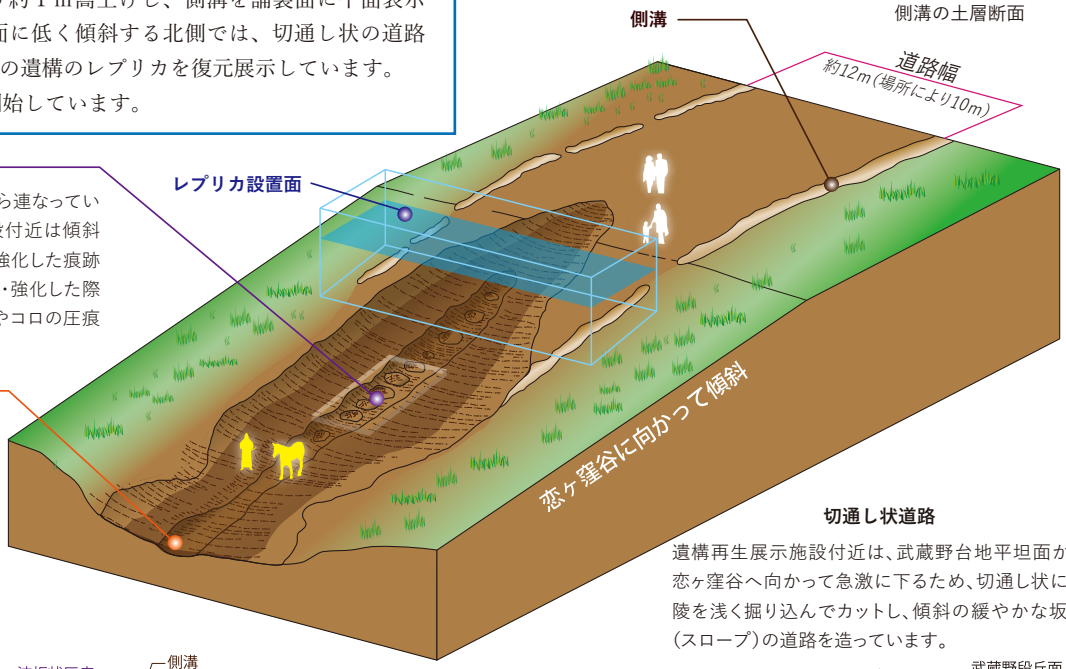
泉町地区で発見された東山道武蔵路（南から）

泉町地区

西国分寺駅の南東は旧国鉄中央鉄道学園跡地で、平成７年の再開発事業に伴う発掘調査により、東西両側に側溝を持つ幅員12ｍの直線道路が南北約340ｍにもわたって発見されました。当時、全国的にも古代の官道がこれほどの規模で発見されることは稀で、事業計画を変更して道路部分は地下に保存されました。現地は遺構検出面より約１ｍ嵩上げし、側溝を舗装面に平面表示しています。また、JR中央線方面に低く傾斜する北側では、切通し状の道路へ構造が変化しており、当該箇所の遺構のレプリカを復元展示しています。平成14年度施工、15年度に供用開始しています。

側溝は主に平地を通る古代道路の両端に設けられます。路面の排水を目的としているほか、溝によって官道である道路の幅（範囲）を示したものと考えられます。
遺構再生展示室付近では幅26～82㎝、深さ34～59cmの側溝が確認されています。

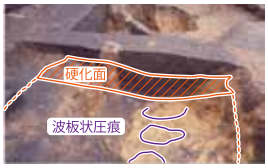
側溝の土層断面



波板状圧痕

路面の中央部にある洗濯板状に接近しながら連なっている不整形な凹凸の窪み。遺構再生展示施設付近は傾斜面に対して窪みに土砂を突き固めて道路を強化した痕跡と思われます。他の道路跡では、路面を舗装・強化した際の丸太棒の圧痕、修羅を牽引する際の枕木やコロの圧痕とも考えられています。

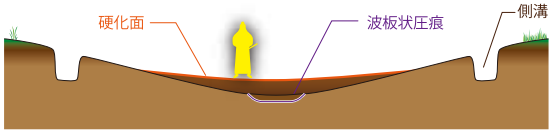
硬化面



硬化面確認状況

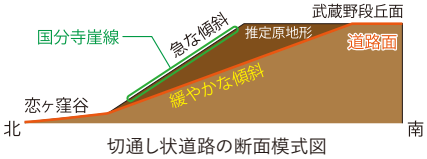
切通し状道路

遺構再生展示施設付近は、武蔵野台地平坦面から恋ヶ窪谷へ向かって急激に下るため、切通し状に丘陵を浅く掘り込んでカットし、傾斜の緩やかな坂道（スロープ）の道路を造っています。



遺構再生展示室付近の断面模式図

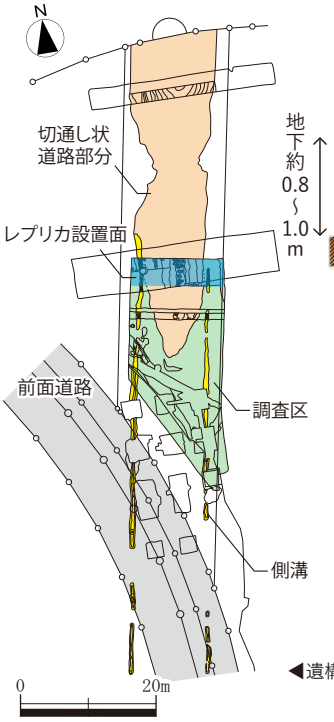
周囲の地面よりも硬くしまった土の上面。中央部が凹レンズ状（皿状）にやや窪んでいることから、人や馬の長期間の通行によって踏み固められた面と考えられます。そのほか路面強化の舗装工事などによって形成される場合もあります。



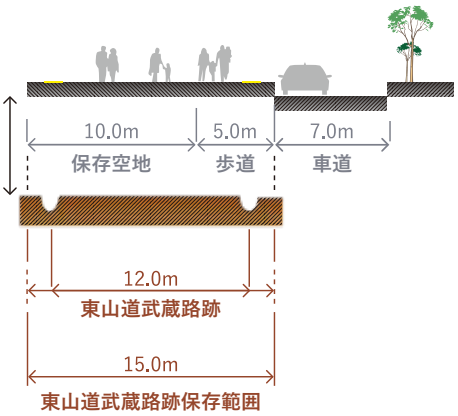
切通し状道路の断面模式図

整備された東山道武蔵路（南から）※令和２年11月撮影

東山道武蔵路遺構再生展示施設と復元模型



◀遺構再生展示施設周辺の東山道武蔵路跡



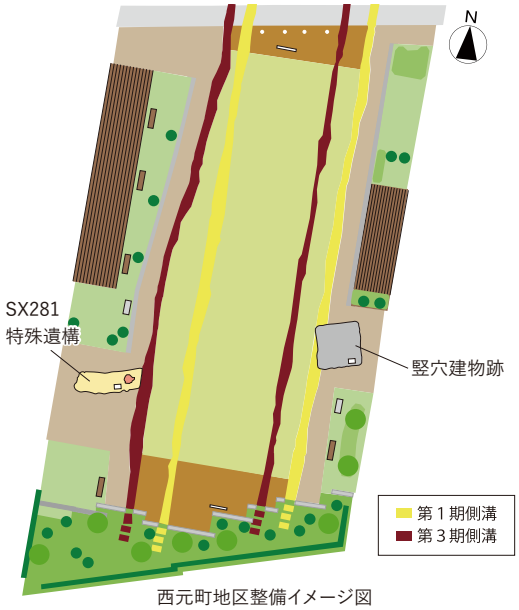
▲泉町地区標準断面イメージ

西元町地区

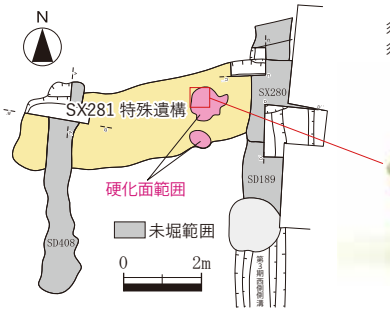
武蔵国分寺の寺院地北西部外縁にあたる旧市立第四小学校跡地では、平成18年に実施した発掘調査で、複数時期にわたる道路側溝や竪穴建物の他、寺域に邪気が侵入することを防ぐ祭祀の跡（SX281 特殊遺構）が見つかりました。

平成22年度に国史跡として追加指定され、23年度に歴史公園として供用開始しています。

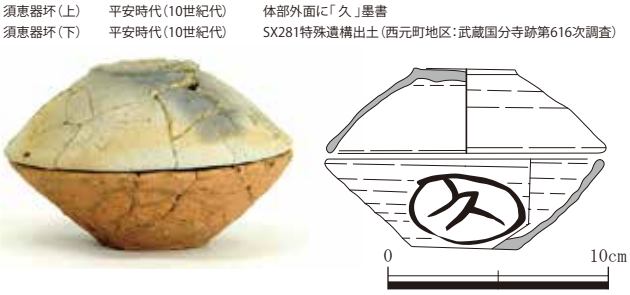
東山道武蔵路（西元町地区）整備状況（南西から）



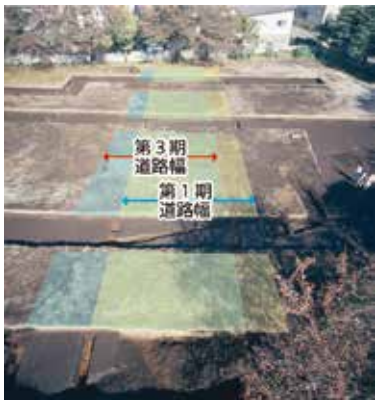
西元町地区整備イメージ図



SX281 特殊遺構の図面と坏出土位置



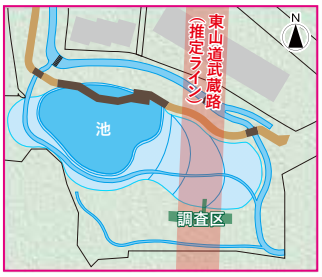
須恵器坏埋納状態推定図



西元町地区で確認された道路跡（上が北）

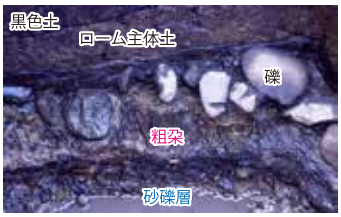
西恋ヶ窪地区

野川源流の恋ヶ窪谷低地にあたる地区では、姿見の池周辺緑地整備事業の一環で平成9～10年に発掘調査を行ったところ、軟弱地盤の上に固く丈夫な道路を作るための敷粗朶（しきそだ）工法と呼ばれる土木技術が採用されている様子が判明しました。現地に遺構は復元していませんが、湿地帯の中で保存されています。



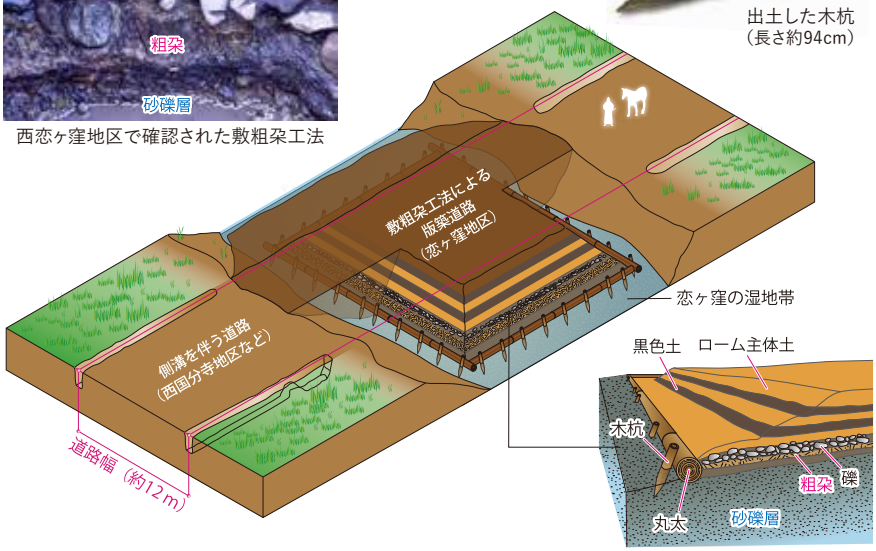
東山道武蔵路の推定ライン

姿見の池（東から）



西恋ヶ窪地区で確認された敷粗朶工法

出土した木杭
（長さ約94cm）



西恋ヶ窪地区の東山道武蔵路模式図

敷粗朶工法の断面模式図

調査区付近の姿見の池湿地帯（西から）

姿見の池は昭和40年代に一度埋め立てられましたが、現在は「国分寺姿見の池緑地保全地域」として整備されています。東山道武蔵路が検出された場所は、泉町地区の切通し状道路（第１期）の北側延長線上にあたります。

参道口整備状況（南方上空から）

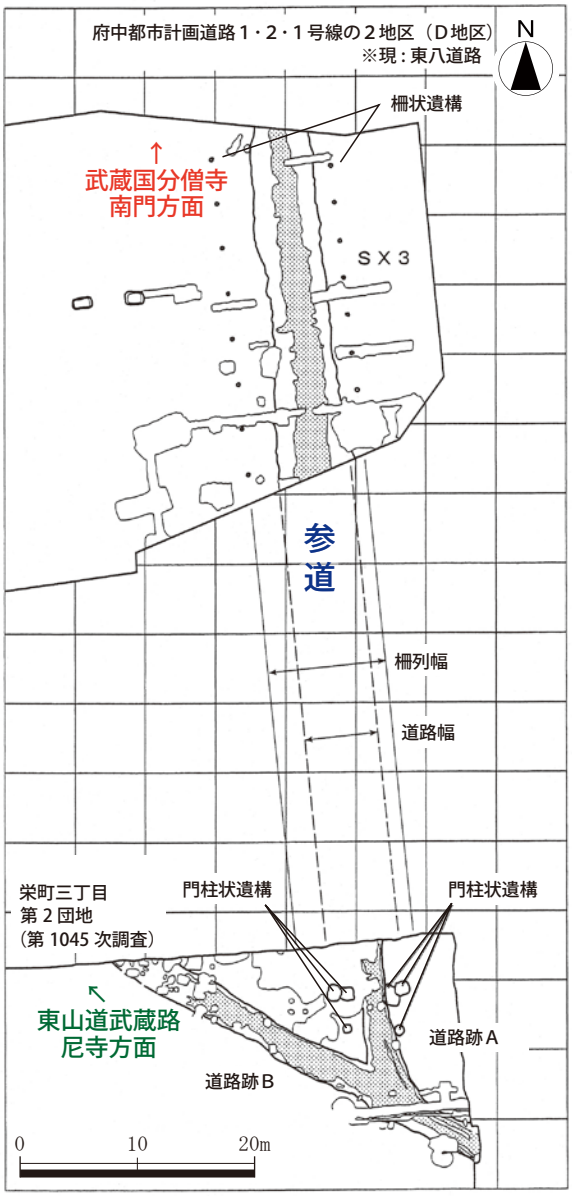
参道口（さんどうぐち）

Gateway to the temple

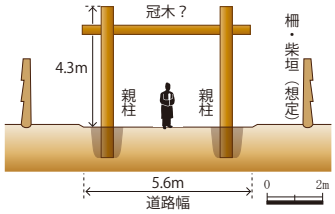
僧寺の伽藍中軸線上に位置します。金堂・講堂の中心から南へ約500m離れた府中市栄町所在の都営住宅建設用地で、僧寺・尼寺の両方面へＹ字状に分岐する道路跡と門柱状遺構が平成11年に確認され、国分寺の参道口であることが判明しました。武蔵国衙と国分寺を繋ぐこの道路が造られたのは８世紀末～９世紀前半で、武蔵国が東山道から東海道へ所属替えされた時期に相当します。

門柱状遺構は僧寺方面に北へ分岐する道路上にあり、東西に対峙する二本柱構造で、柱穴の重複関係から近い場所で２回の建て替えが行われています。

当該地は、都営住宅地内にある「万作（まんさく）の木公園」で、道路跡の平面表示と門柱状遺構が復元整備され、平成17年には国の史跡として追加指定を受けました。



参道口と門柱状遺構 全体図

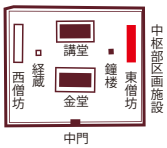


参道口にかかる門柱状遺構イメージ

門柱状遺構の柱痕断面（南西から）

整備後の万作の木公園（南東から）

発見された参道口と門柱状遺構（南から）



東僧坊（ひがしそうぼう）

East Priests dormitory

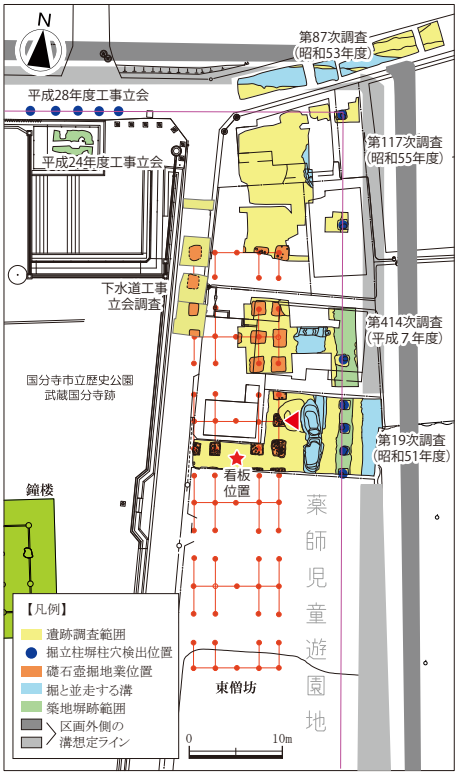
（令和元年度看板設置）

僧坊は寺院内で僧尼が居住する建物で、武蔵国分僧寺は金堂・講堂の東西両脇に鐘楼と経蔵があり、その外側に僧坊がそれぞれ建ち並ぶ伽藍配置をしています。東僧坊は、昭和51・55年と平成７年（1976・80・95）に個人住宅建設や学術目的で発掘調査を行ったところ、東西に梁行４間（9.0m）、南北に桁行８間（24.0m）以上の規模を有する長大な礎石建物であることが判明しました。

国分寺建立の詔には、「僧寺には必ず僧20人を住まわせ、その寺の名は金光明四天王護国之寺とせよ。尼寺には尼10人とし、寺の名は法華滅罪之寺とせよ」とあります。奈良時代の僧坊は棟方向に間口を等間隔で分割し、小さな部屋（房）を幾つも連結したような長屋状の建物で、武蔵国分僧寺の東僧坊は５房で構成されています。一方の尼寺でも、推定講堂跡の北側で東西方向に５房が連なる尼坊が１棟確認されています。

１房の規模は間口が柱間３間（9.0m）、奥行が柱間４間（9.0m）で、面積は25坪（約81.0㎡）を有します。各房の入口中央には扉、左右外壁には連子窓が取り付き、内部は土間もしくは板敷で、房の東西両側には廂を伴う切妻屋根であったことも想定されます。なお、礎石を据えた下部には、約1.0～1.5m四方で深さ80cm程の掘り込みを伴い、その中は黒色土と黄褐色土を交互に版築する壺掘り地業を施していましたが、原位置を留める礎石は確認されていません。

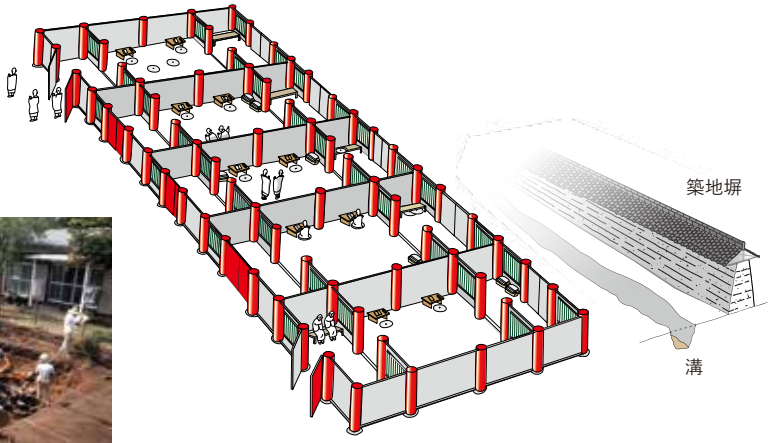
また、東僧坊の東際には中門を起点として伽藍の中枢部全体を遮蔽する塀や溝などの施設がめぐり、塀で囲まれた範囲は東西約156m、南北約132mにも及びます。塀は僧坊から約７m東側にあり、当初は７～８尺間隔で柱穴が並ぶ掘立柱塀でしたが、後に築地塀へと建て替えられた痕跡があり、塀と並行して内側と外側に溝がそれぞれ走っている様子も発掘調査で明らかとなっています。



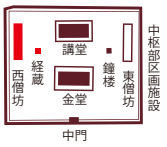
東僧房と周辺の調査状況

壺掘地業の版築状況（東から◀）

第 19 次調査測量作業風景（南東から）



僧坊内イメージ図　作画：冨沢　好



経蔵・西僧坊（きょうぞうにしそうぼう）

Sutra repository・West Priests dormitory

（令和２年度看板設置）

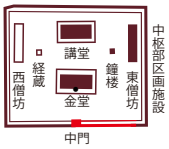
経蔵は経典などの書物を保管する建物、僧坊は僧が起居する建物です。武蔵国分僧寺では、金堂・講堂の東西両脇に鐘楼と経蔵があり、その外側には２棟の僧坊が建ち並ぶ伽藍配置をしています。

奈良時代の僧坊は棟方向に間口を等間隔に分割し、小さな小部屋（房）を幾つも連結したような長屋状の建物をしていますが、経蔵・西僧坊に比定される場所は歴史公園の外側で、現在は墓地に含まれています。そのため、これまで発掘調査は行われておらず、建物の規模や構造等の詳細は不明ですが、鐘楼・東僧坊とほぼ同程度の建物であったと思われます。

大正 11 年に武蔵国分寺が国史跡として指定された当時の記録によると、礎石が 14 個点在している様子が窺えますが（２頁参照）、現在も墓地の中の通路や区画の内側などに、幾つかの礎石が埋まったままの状態で残されています。

大正 11 年頃の経蔵・西僧坊付近の様子

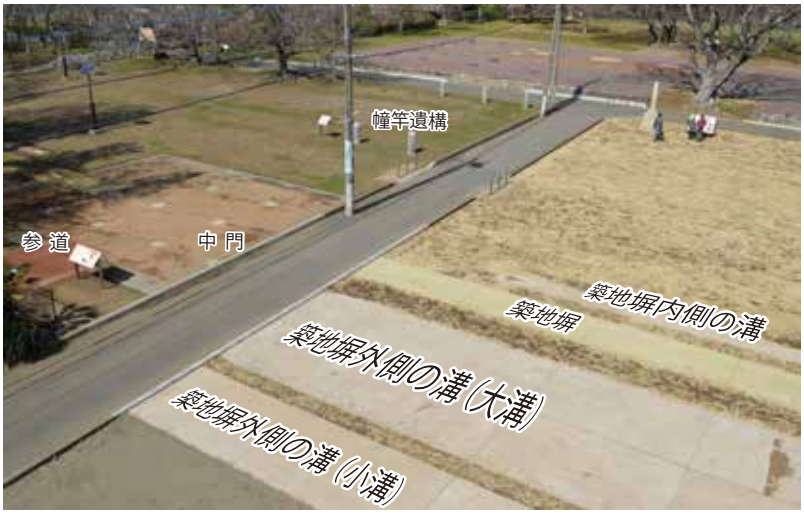
墓地の中に残る経蔵の礎石
（墓地の中に入っての礎石の見学はご遠慮ください）



伽藍中枢部南辺区画施設
築地塀・溝

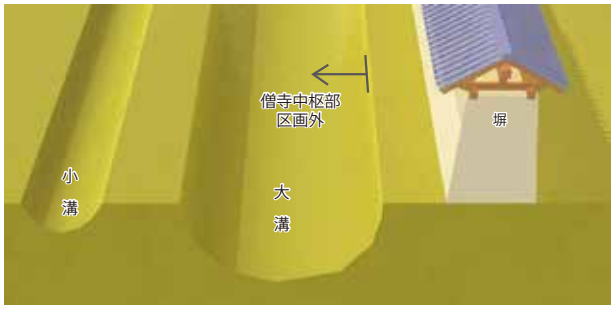
South end of central part of the temple cloister
***Tsuiji-bei* (earthen wall with roof)・Ditch**

（令和元年度整備・２年度看板設置）



整備後の中枢地区南辺区画施設（南東から）

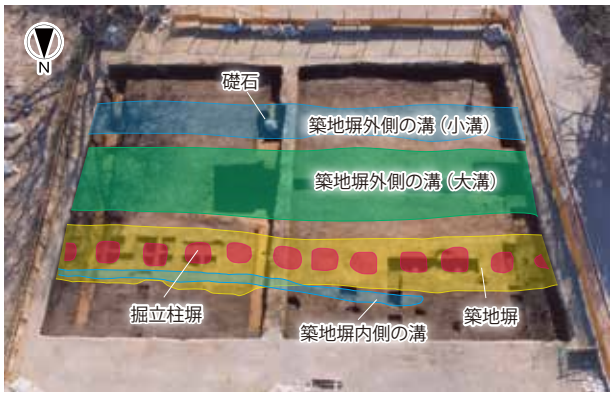
中門東側（北から）



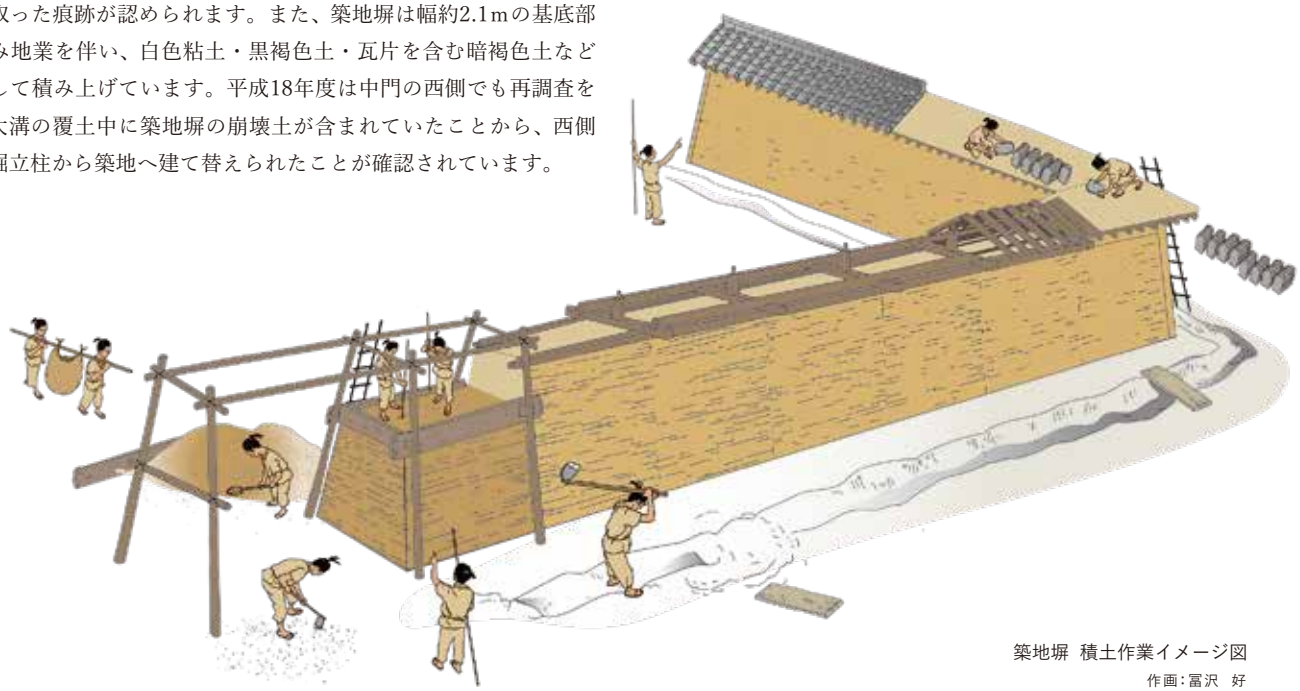
塀と大溝・小溝（イメージ図）

全国各地の国分寺には中門の両側に廻廊が取り付き、金堂や講堂などの建物と連結している伽藍配置がみられます。しかし武蔵国分僧寺の場合は、昭和40年に行われた発掘調査で、中門の中央柱列の西側延長線上60ｍの区間にわたって地中に柱を埋め込む構造の掘立柱塀と、塀の南側に幅３ｍの大溝が並走する様子が確認され、伽藍中枢部は廻廊ではなく、塀と大溝によって囲まれていることが判明しました。

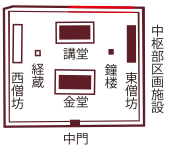
その後、平成17年度に中門とその東側範囲を発掘調査したところ、中枢部の南辺を区画する塀は当初掘立柱であったものが、後に築地へと建て替えられている様子が確認され、さらに築地の南側には大小２条の溝、築地の北側には小溝が１条並走していることが明らかとなりました。掘立柱塀は、約2.4ｍ（８尺）ごとに直径30～36cm程の柱を垂直に立てたもので、建て替えはしておらず、最後に柱を抜き取った痕跡が認められます。また、築地塀は幅約2.1ｍの基底部に掘込み地業を伴い、白色粘土・黒褐色土・瓦片を含む暗褐色土などを版築して積み上げています。平成18年度は中門の西側でも再調査を行い、大溝の覆土中に築地塀の崩壊土が含まれていたことから、西側の塀も掘立柱から築地へ建て替えられたことが確認されています。



築地・掘立柱塀跡と大溝・小溝の検出状況（北から）



築地塀　積土作業イメージ図
作画：冨沢　好



伽藍中枢部北辺区画施設
築地塀・溝

North end of central part of the temple cloister
Tsuiji-bei (earthen wall with roof)・Ditch

（令和２年度看板設置）

伽藍中枢部は塀と溝によって外部と遮蔽された空間で、塀を基準にした場合に東西約156m、南北約132mの規模を有します。この付近では平成20・23年度に発掘調査を行い、中枢部北辺の掘立柱塀の柱穴４基と塀の内側を並走する溝が発見され、溝の覆土には築地塀の崩壊土が含まれていました。

講堂中軸線上にあたる調査区の東側は後世に削平を受けており、遺跡の様相は明確ではありませんでしたが、平成24・28年度に公園の北側道路上でガス・水道管の布設替え工事が行われた際に、掘立柱塀の柱穴が並んで発見されました。

また、公園入口の階段付近では史跡整備工事中に築地塀の可能性がある白色粘土の版築土が確認されたため、急遽、公園の設計を変更して、芝生の直下に版築土を保護しています。

平成20・23年度調査

調査区全景（西から）

掘立柱塀柱穴検出状況

平成24年度ガス管工事立会

工事立会状況

検出された柱穴（▲印）

平成24年度史跡整備工事立会

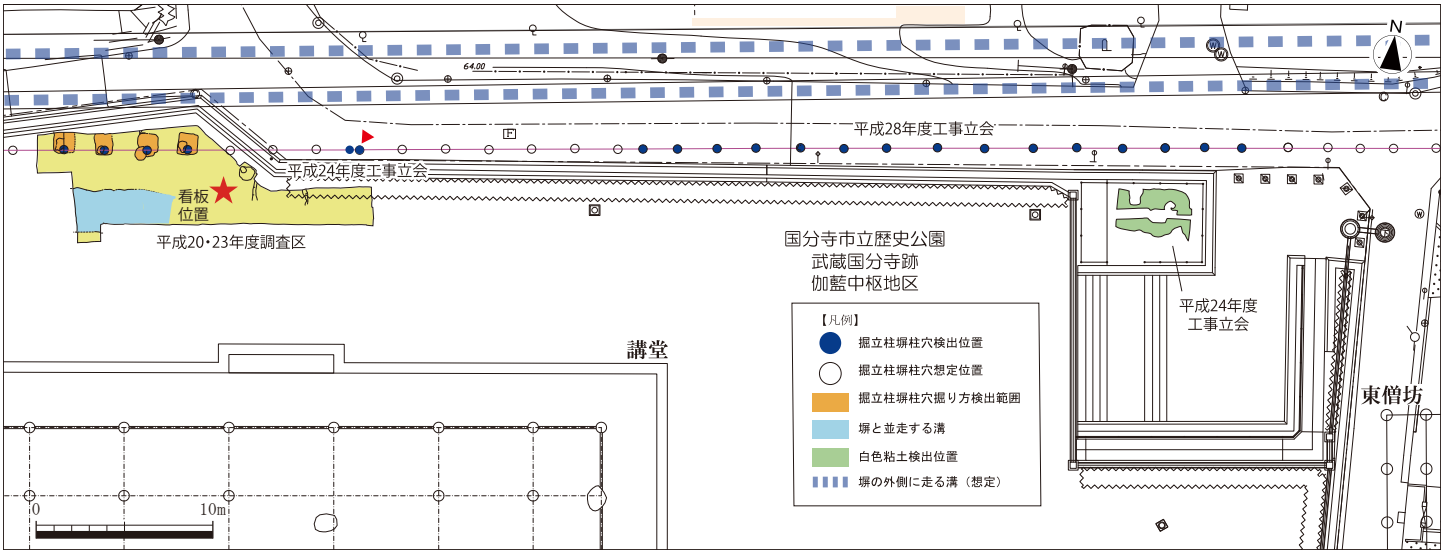
工事立会状況（白線部分が粘土検出範囲）

版築土断面

遺構保護状況

掘立柱塀跡

看板設置状況（★）



北辺区画施設周辺の調査状況

武蔵国分寺の礎石

むさし　こくぶんじ　そせき

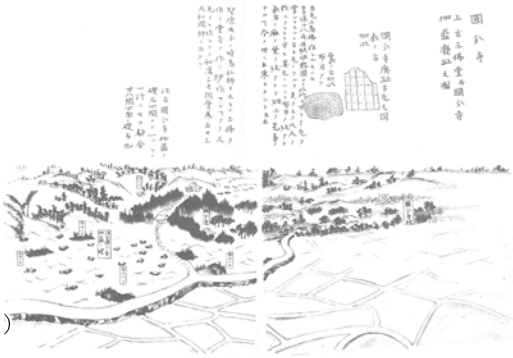
Pillar base stone

（令和２年度看板設置）

国府とともに古代武蔵国の中心地であった国分寺は、律令国家の衰退によって大きく変貌を遂げました。この付近一帯は、近世には江戸近郊の農村として国分寺村が営まれましたが、当時の村には古代に栄華を誇った伽藍の姿はなく、畑の中でひっそりと礎石や瓦が点在していた様子が各種地誌類に描かれています。

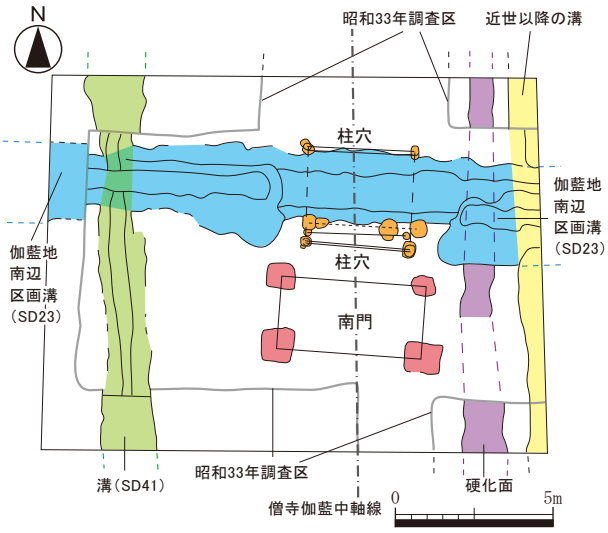
奈良時代に建てた堂舎の礎石は据えた当時の位置のまま動かずに残っているものもありますが、多くは後世に他の場所へ持ち去られてしまいました。展示している大きな石も本来は武蔵国分寺の主要な建物に由来するもので、多摩川の上流で採れる砂岩やチャートが使われています。

昭和 56 年に寄贈を受けた武蔵国分寺の礎石

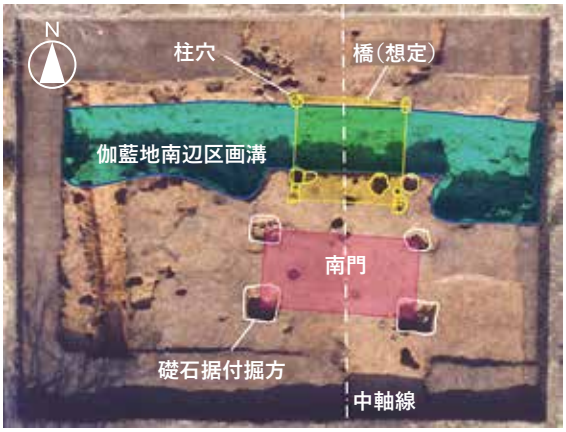


【左】上古三佛堂幷国分寺伽藍廃跡之図
（『武蔵名勝図会』より）

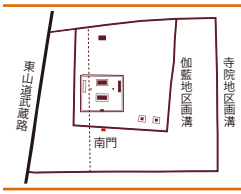
【右】江戸時代の国分寺村の様子
（『江戸名所図会』「国分寺 伽藍旧跡」より）



南門地区　調査全体図



南門跡検出状況（上が北）



南門跡

South Gate

中門と区画施設に囲われた中枢部の南側には、南門と東西に伸びる区画溝に区切られた伽藍地が広がっています。主要建物に続き昭和33・平成19～20年に行った発掘調査では、中門中心から約65ｍ南の位置で、２本の親柱と２本の控え柱をもつ４本柱の独立門が見つかりました。親柱の下には壺掘地業が施され、礎石建ての格式高い構造をとりますが、基壇は確認できませんでした。屋根瓦も周辺ではほとんど確認できず、板葺きなどの簡素な門であった可能性が考えられます。調査の結果、当初想定していた「南大門」ほどの大きさではなかったため、武蔵国分寺跡では「南門」と呼称することとしました。あわせて伽藍地区画溝をまたぐ橋脚の痕跡が見つかっています。溝の掘削形状から検討すると、南門北側は当初溝を掘らず、地続きにして往来していたようで、その後幅約３ｍの木橋が架けられ、何度も造り替えられたと考えられます。

今後は、参道・南門の遺構表示、総合案内板等のエントランス整備を行う予定です。

南門跡および橋脚遺構（西から）

伽藍地区画溝断面（SD23 東から）

伽藍中枢部周辺地域の基本設計

対象範囲全域

① 史跡内の回遊性の向上　② 利便施設の適切な配置
③ 防犯防災対策の検討　④ 維持管理の軽減対策の検討

平成 21 年２月に策定した「史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）整備実施計画」に基づき、国史跡武蔵国分寺跡の第一期整備として示された事業計画のうち、伽藍中枢部周辺地域［ 南門地区、北方・推定中院地区、塔地区 ］を対象に、保存整備工事の基本事項を定めた指針です。南北の伽藍中軸線をより明確化して、史跡の範囲･広がりを示せるようにするとともに、より市民に親しまれ、活用される史跡とする整備目標を掲げました。
対象範囲全域で、史跡内の回遊性向上、利便施設の適切な配置、防犯・防災対策や維持管理の軽減対策の検討を行います。

北方･推定中院地区　令和8･9年度

伽藍中枢部の北側は、法隆寺所蔵『大菩薩蔵経』の奥書にある「中院」跡に比定され、国分寺崖線下には大型掘立柱建物、須恵器大甕を据えた特殊な建物跡のほか、伽藍中枢部の北西部を遮蔽する築地塀･溝跡、伽藍地西辺区画溝などが発見されています。これらの遺構を整備するとともに、現在、史跡地へのメインアクセスが北側のJR国分寺駅･西国分寺駅からである現状を踏まえて、史跡主要部へのエントランスとして史跡全体、および周辺の関連遺跡（武蔵国分尼寺･東山道武蔵路）の案内を行える空間とします。

伽藍中枢地区

大半部分は、平成23～令和２年度に施工して整備を終了しました。中門東側の南東部は南門地区の整備工事にて整備し、講堂北側の北西部は、北方・推定中院地区の整備工事で整備します。

南門地区　令和4~7年度（右ページ部分）

武蔵国分寺の南側正面入口にあたり、基本設計の中心となる地区です。一部道路を廃道し、南門跡および参道跡を整備することにより、伽藍中枢地区に向けた視認性を確保するとともに、伽藍地南辺区画溝を表示して寺院（伽藍地）の南限を示します。さらに南方に離れた参道口方面（府中市栄町）への導線を誘導し、南門地区西側に隣接する市立第四中学校付近は修理院に比定されているため、その歴史性を踏まえた活用（体験学習･市民交流活動等）が行えるよう整備を進めます。

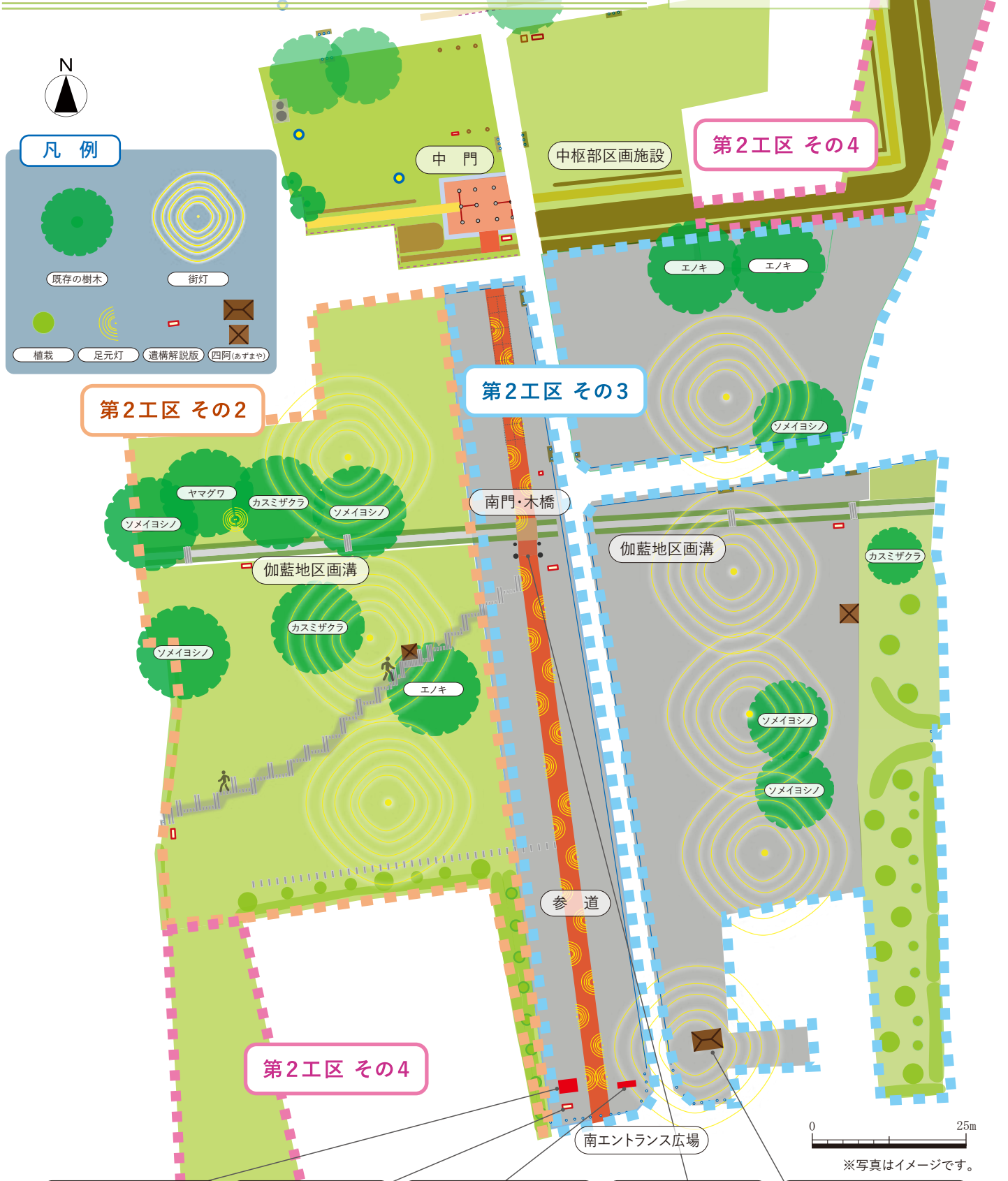
塔地区　令和10年度～

国分寺のシンボルでもある七重塔が存在した地区です。武蔵国分寺では、二つの塔遺構が発見されており、礎石が現存する塔跡1の本格的な整備は将来行う予定です。さらに、平成15年に新たに発見された塔跡2や伽藍地区画溝を表示することにより、伽藍地の南東隅にあたる当該地区に塔が存在したことを顕在化させます。また、塔の南側は苑院･花園院に比定されていることから、道路の一部廃道を検討するとともに適正な樹木間伐等の緑地整備を行い、歴史性を踏まえた活用（体験学習、市民交流活動等）が行えるよう整備を進めます。

南門地区の実施設計(令和４～７年度)

令和4年度 完了

南門地区樹木の修景工事
(第2工区 その1)



※写真はイメージです。

大型地形模型

遺構解説板

名称標識

南門・木橋

四阿(あずまや)

史跡整備事業の概要

僧寺地区の史跡整備は、平成15年3月策定の「史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）新整備基本計画」に基づいて、当初は20か年を事業期間と定めて着手しました。新整備基本計画には、史跡指定地内全体を公有化したうえで、現道を廃止し、中門・鐘楼・築地塀などの建造物復元を目指すことをうたっています。

しかし、史跡整備に先行して実施した発掘調査で新たな遺構の発見や、指定地の公有化事業の進展、東山道武蔵路跡の国史跡としての附指定、開発に伴う僧寺北東地域や国分寺崖線下地域の追加指定など、史跡を取り巻く様々な環境変化があり、具体的に着手可能な実行計画として、平成21年2月に「史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）整備実施計画」を定めました。

そこでは、指定地内の現公有地内で、遺構の平面的な整備を広げ、史跡を広く体感できる姿を整備の中間的目標とし、まず平成23～令和2年度に伽藍中枢部の整備工事を行いました。

今後は、伽藍中枢部周辺地域に対象を広げて、整備実施計画で目標とした現公有地内での史跡整備を推進します。

史跡武蔵国分寺跡〔僧寺地区〕新整備基本計画

平成15年3月策定

史跡指定地内を全体的に公有化・整備

整備の最終到達目標を設定しました

史跡と周辺環境の調和を目指した地区交通の検討

史跡武蔵国分寺跡周辺地区まちづくり計画

平成19年8月策定

史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）整備実施計画

平成21年2月策定

現公有地内で平面的整備の広がりを優先（第一期整備）

整備の中期的目標を設定しました

伽藍中枢部の整備

完了

平成23～令和2年度施工

金堂・講堂基壇復元、鐘楼・中門平面表示

幢竿遺構・堂間通路復元、案内板設置など

史跡武蔵国分寺跡（僧寺地区）第一期整備〔中枢部周辺地区〕基本設計

令和2年3月策定

南門地区・北方（推定中院）地区・塔地区エリアごとの目標を設定

いまココ

伽藍中枢部周辺の整備

令和4～7年度施工予定――南門地区

令和8～9年度施工予定――北方（推定中院）地区

令和10年度施工予定――塔地区

第二期整備実施計画の策定

中枢伽藍内建造物（中門・鐘楼・築地塀など）の復元計画の検討

史跡武蔵国分寺跡は、大正11年（1922）に国の指定を受けてから、令和4年（2022）で100周年を迎えました。国分寺市のシンボルの一つでもあり、創建後1300年の歴史を語り継ぐため、101年目以降も歴史公園の整備・活用を推進します。

南門地区
整備完了後のイメージ図

伽藍中枢部周辺地域
整備完了後のイメージ図

歴史公園及び整備事業用地では、近隣の方や他の利用者に配慮し、マナーを守ってご利用ください。
いつでも・誰でも・気持ちよく利用できるようにご協力ください。

- 地下に大切な文化財が埋まっているので地面を掘らないでください
- 犬のリードは短くし、放さないでください フンは放置せず、持ち帰ってください
- ネコの置きエサはしないでください ※不衛生になるため
- ゴミは持ち帰ってください ※不法投棄やポイ捨てをしたり、埋めたりしないでください
- 花火はしないでください 許可なく火気を使用しないでください
- 壁・フェンス・倉庫・看板にボールをあてないでください
- スポーツ等の練習・教室で史跡の一部を独占的に使用しないでください ※使用の際は事前申請が必要です
- 植物などを採取しないでください 勝手に植えることはできません
- 瓦・土器・石を持ち帰らないでください
- 周囲の畑の中に入らないでください
- 小型無線飛行機（ドローン）は使用できません
- 自動車・バイクなどを乗り入れないでください
- 遺跡の復元表示等の工作物を壊さないでください フェンス・倉庫・看板を壊さないでください
- ゴルフ・野球（硬球）など、利用者に迷惑のかかる球技はできません　※軟らかいボールは遊べます
- 近隣のかたに迷惑になるような騒音はやめてください 夜遅くや早朝（午後９時～午前７時ごろ）に大人数で集まって会話することはやめてください

出店、募金、署名運動、業としての映画（動画を含む）・写真撮影、競技会、展示会、集会その他これらに類する催し物のため史跡を団体などで独占的に使用する場合は、ふるさと文化財課へ使用申請書を提出してください。
※史跡周辺は安全管理のため、シルバー人材センター会員が、史跡管理ベスト（黄緑色）を着て巡回しています。

・本冊子は、史跡武蔵国分寺跡 附東山道武蔵路跡で、令和４年度末までに整備を完了した各所の紹介と史跡整備事業の概要をまとめたガイドブックです。
・史跡地の一部は府中市にもまたがっており、このうち「参道口」の項は、府中市教育委員会より写真等の情報を提供していただきました。
・講堂基壇復元、金堂・講堂間の通路遺構復元の項は、友好都市の埼玉県鳩山町教育委員会より鳩山窯跡群の写真等の情報を提供していただきました。
・史跡指定100周年記念ロゴマーク・キャッチフレーズは、公募により令和４年度に決定いたしました。
・教育推進マークは、令和４年第３回教育委員会定例会にて決定いたしました。

国指定史跡武蔵国分寺跡 附東山道武蔵路跡
歴史公園ガイドブック ver. 5

発　行　日：令和５年（2023）６月／印刷：株式会社菰田印刷
編集・発行：国分寺市教育委員会 教育部 ふるさと文化財課
東京都国分寺市西元町1-13-10　武蔵国分寺跡資料館内
TEL：042-300-0073　FAX：042-300-0091
Mail：bunkazai@city.kokubunji.tokyo.jp